

～耳を開いて～ 日本の音楽風景

トーマス・ヘル

2007年から年に2回、東京で3日間に渡って開催されている「新しい耳」フェスティバル。

このフェスティバルのモットーは、聴衆に新しい、もしくは滅多に聴かれることのない作品を紹介するという。それは、何も20、21世紀の音楽に限られているわけではない。

「atarashii mimi」とは、ドイツ語にすると、新しい、開かれた耳となる。

フェスティバルのコンサートは数ある東京のサロンの中の一つで開催される。それは独立した建物ではなく、ビルの中にある。木と石とコンクリートと高い壁で建築された美しいエレガントなホールは、東京の中心地という立地にも関わらず、都会の喧騒の中に静かな空間を生み出している。

このフェスティバルには、音楽家、演劇家や学者、大学教員などが定期的に訪れ、コンサート後は、演奏家を交えた交流が持たれている。

もちろん、このフェスティバルのために作品を委嘱された作曲家も頻繁に招聘され、コンサートでは聴衆との芸術談義が持たれるのも魅力である。なんといっても、見渡すことのできるホールの大きさのおかげで、演奏家と聴衆の密なエネルギーの交信を可能にしている。あまり聴かれることの少ない作品をコンサートに取り上げることを大事に音楽活動をしている私にとって、このフェスティバルのアイデアは、最初からとても親近感を感じていた。

私がこのフェスティバルで、日本でも現在とても人気が出てきたリゲティの全曲エチュードを演奏した時は、邦人作曲家の原田敬子の新曲の初演をプログラムに組んだ。彼女とは、すでにドイツのフレーデン国際音楽祭で、ヴァイオリンとピアノのための *Ikis* (2007) という作品の世界初演で知己を得ており、彼女の音楽の真価は知っていた。

彼女の「グランドピアノのための4つの手 I-III」は、ピアニストであり、このフェスティバルの芸術監督でもある廻由美子教授と私のために、委嘱作品として作曲された。

この非常にオリジナリティーに溢れ、同時に複雑な作品は、両方の演奏者に息のあった高度な調整力を要求しており、それは非常に魅力的な挑戦であった。例えば、1楽章などは、演劇的な要素、声の使用、日本の伝統音楽への関連が見られ、まるでパーカッションの作品のようであった。

コンサート後、「音楽の友」という日本で広く読まれている毎月発行の音楽雑誌上で、一年間、星の数ほど東京ではコンサートがあるというのに— 一人の音楽評論家より私の演奏会が2010年のベストコンサートに選ばれたのは、私にとって大きなサプライズと喜びだった。

私が「新しい耳」について、細かく言及したのは、私の経験上、このフェスティバルのよ

うな取り組みは、日本ではむしろ珍しいと思うからである。現代の音楽に対して、熱意を持って演奏家や作曲家を応援している聴衆は、確実にその中に存在しているとはいえども、日本のコンサートは、明らかに西洋のいつも決まったクラシック音楽と著名な演奏家によって、確立されている。

そして、私が見てきた限り、日本において多くの音楽家やアンサンブルを取り巻く音楽活動の環境は、必ずしも容易ではない。何より大手のエージェントのバックアップという幸運がなければ、宣伝費、チケット販売、ホール 賃貸料、ピアノ調律代などなど、コンサートのための全ての経済的責任を自分で負わなければならないのだ。

また私は、作曲科やピアノ科を対象とした演奏解釈講座やマスタークラスで、何度か東京音楽大学、国立音楽大学、ピティナなどから招聘を受ける機会に恵まれた。講座では、リゲティの作品も含んでいたのだが、例えばドイツと比べると日本の音楽大学のカリキュラムにおける現代音楽分野は、はるかに少なく組まれている。でもだからこそ、学生たちの間では、関心が大きいのかもしれない。私は毎回、学生たちの優れた準備姿勢と規律ある態度に、そして教員の開かれた対応に感銘を受けている。

今度の11月に、私は再び「新しい耳」フェスティバルに呼んでいただき、東京でコンサートをすることになった。プログラムにはカイヤ・サーリアホ、ラインハルト・フェーベルのパガニーニの主題による変奏曲（シュトゥットガルトのエクラー音楽祭で世界初演）北爪道夫、そして、再びリゲティのエチュードを組んでいる。

新音楽時報 ショットミュージック

2014年 第3号（5/6月） 日本特集号 掲載